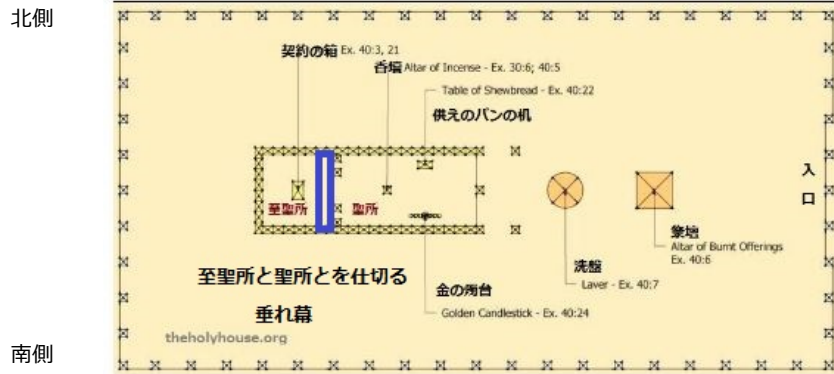


## 「裂かれた垂れ幕」に象徴されるイエシュア



### ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」についての第十一回目の学びです。このシリーズ、残すところあと一回となりました。今回は「至聖所と聖所を仕切る垂れ幕」、そしてそれがイエシュアの十字架の死によって上から真っ二つに裂かれたことが、神のご計画において何を意味するのかを考えてみたいと思います。

### 1. 「垂れ幕」の概要

●聖所の入り口と、聖所と至聖所との間に二つの垂れ幕があります。素材はいずれも同じものですが、デザインが異なります。つまり、聖所と至聖所とを仕切っている垂れ幕には、聖所の入り口の垂れ幕にはない「ケルビム」が織り込まれているのです。まずは、聖書を見てみましょう。

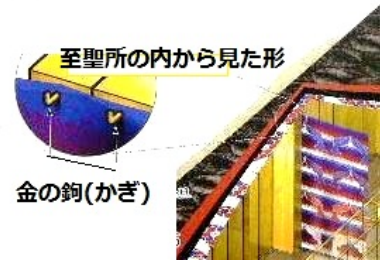
【新改訳改訂第3版】出エジプト記 26 章 31～37 節

- 31 青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で垂れ幕を作る。これに巧みな細工でケルビムを織り出さなければならない。
- 32 これを、四つの銀の台座の上に据えられ、その鉤が金でできている、金をかぶせたアカシヤ材の四本の柱につける。
- 33 その垂れ幕を留め金の下に掛け、その垂れ幕の内側に、あかしの箱を運び入れる。**その垂れ幕は、あなたがたのために聖所と至聖所との仕切りとなる。**

●特に、31 節「青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で垂れ幕を作る。これに巧みな細工でケルビムを織り出さなければならない。」とあります。ここでの「垂れ幕」は「パーローヘット」(פְּרֹכֶת)です。ちなみに、幕屋(天幕)をおおう四枚の「幕」は「イエリーアー」(הַיְעָרָה)。幕屋の大庭を囲む亜麻布の掛け幕は「ケラ」(קְרָלָע)です。同じ「幕」でも原語がみな異なります。

### (1) 形状とサイズ

●聖書には「垂れ幕」のサイズについては記載されていませんが、幕屋を支えている柱が10キュビトですから、類推すると10キュビト弱の長さであったと考えられます。またその厚さについても具体的な寸法の記述がありません。しかし垂れ幕の両面が同じデザインであり、ケルビムの刺繍が入っていたとすれば、それなりの厚さがあったと考えられます。「垂れ幕」は柱にあるフック(鉤)に掛けるようになっていました。



### (2) 素材とデザイン

●二つのケルビムが向き合う形でそれぞれの翼と翼が相對しています。聖書にはケルビムの模様の指定はありますが、青色、紫色、緋色の撚り糸、撚り糸で織った亜麻布で刺繍をした幕を作るというだけで、具体的なデザインについての指示の記述がありません。それは、白い亜麻布をベースにして、青と紫と緋色の撚り糸で織りなされています。それは「巧みな細工」(新改訳)、「意匠家」(新共同訳)、「たくみな機織り人の手」(バルバロ訳)にゆだねられています。「**巧みな細工**」はヘブル語で「マアセー・ホーシェーヴ」(מְעִשֵׂה חָפְזִים)です。「ホーシェーヴ」(חָפְזִים)は、「計画する、考え出す、思い巡らす」を意味する「ハーシャヴ」(חָשַׁב)の分詞で「技術者、織工(しよっこう/おりこう)、巧みなわざ」を意味します。



●聖所の入り口の垂れ幕と聖所と至聖所を仕切る垂れ幕のベースとなっている素材は白い**亜麻布**です。それに青色、紫色、緋色の撚り糸が加わります。それらの色もすべてイエシュアを啓示していますが、「亜麻布」(ヘブル語の「シエーシュ」שֵׁשׁ)の白色は、「キリストは私たちにとって、神の知恵となり、また、**義**と聖めと、贖いともなられました」(Iコリント1:30)とあるように、「**キリストの義**」を象徴しています。「シエーシュ」(שֵׁשׁ)の初出箇所は創世記41章42節です。

そこで、パロは自分の指輪を手からはずして、それをヨセフの手にはめ、**亜麻布**の衣服を着せ、その首に金の首飾りを掛けた。

●「シエーシュ」の類義語に「ブーツ」(בָּוֵץ)という語があります。これも上等なエジプト産の白亜麻布、**亜麻布**を意味します。旧約ではエステル記1章6節、8章15節に使われています。モルデカイは「青色と白色の王服を着、大きな金の冠をかぶり、**白亜麻布**と紫色のマントをまとして王の前から出て来た。」(8:15)とあります。ダビデもこの白亜麻布の衣をまとして賛美しています(I歴代誌15:27)。契約の箱を担ぐレビ人、歌うたいたち・・・も同様でした(II歴代誌5:12)。I歴代誌4章21節にはユダの氏族の中に白亜麻布業を営む者がいたことを記しています。いずれにしても、**白い亜麻布**は「**義なる王メシア**」を象徴しているのです。垂れ幕は、白色の亜麻布の他に、「青色・紫色・緋色」の撚り糸で織られて作られています。



- ①「青色」は天を表す色です。「天」は神性を意味します。そしてこの色は、しばしば同じく神を意味する「金色」と共に用いられます。
- ②「紫色」は王を表す色です。
- ③「緋色」は血の色です。この血は贖罪(身代わり)を表す色です。

●このように、垂れ幕の四つの色は、「義となられたイエシュア」ご自身であり、神であると同時に王であり、その方が私たちのために十字架で血を流して下さった贖い主であることを象徴しています。しかもこの方は、至聖所へと至る新しいいのちの道を開いてくださった唯一の方です。そのことを見える形で示されたのが、「裂かれた垂れ幕」です。共観福音書の著者たちはみな、イエシュアが十字架の上で息を引き取られた時、「神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた」(マタイ 27:51、マルコ 15:38、ルカ 23:45)ことを記しています。

## 2. 至聖所と聖所とを隔てる垂れ幕が裂かれたことが意味すること

【新改訳改訂第3版】ヘブル 10 章 19～20 節

- 19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入る※1 ことができるのです。
- 20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕※2 を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

### (1) 「大胆にまことの聖所に入る」※1

●19 節をギリシア語原文で見ると、「こういうわけで、私たちは、まことの聖所に入るという大胆さを持っている」とあります。どんな大胆さかといえば、「至聖所へ入ることの大胆さ」です。なぜそんな大胆さが持てるのかと言えば、イエシュアの血が注がれたからです。「まことの聖所に入る道」を、20 節では「新しい生ける道」と言い換えられています。その道をすでにイエシュアが「設けてくださった」(創設して下さった)からです。

●「大胆さ」=「パッレーシア」(παρρησία)は 31 回。ヘブル 4 章 16 節にも「ですから、私たちは**大胆さをもって**、恵みの御座に近づこうではありませんか。」とありますが、「パッレーシア」(παρρησία)は、「大胆に」「確信をもって」「確信に満ち溢れて」「はっきりと」「はばからず」という意味です。使徒パウロが「また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。」と要請していますが、「大胆さ」と「確信」は表裏一体なのです。

●かつては、アダムとエバが罪のゆえにエデンの園から追放されました。それはアダムが自らエデンの園にあるいのちの木から取って食べることがないように、神がエデンの園の東にケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれたとあります。ところが今や、「至聖所」と「聖所」を仕切っている垂れ幕が上から引き裂かれ

たことで、エデンの園に入る「新しい生ける道」が開かれたのです。

## (2) 聖所の垂れ幕はイエシュアの肉体 ※2

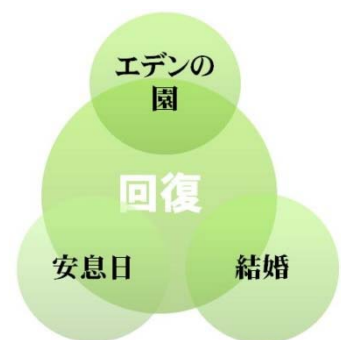
●聖所の垂れ幕は、イエシュアの肉体(「サルクス」σάρξ)の象徴でした。「肉体」はヘブル語で「バーサール」(בָּשָׂר)。それは「からだ、肉体」の意味の他に、「良きおとずれを宣べ伝える」という意味があります。いみじくも、イエシュアはご自身の肉体(垂れ幕)を裂くことによって、私たちのために、真新しい、生ける道を創設してくださったのです。「真新しい」と訳された「プロスファトス」(πρόσφατος)は、この箇所にはしか使われていない珍しい語彙です。それまで存在しなかった「真新しい」生ける道を通して、私たちは大胆に至聖所に入ることができるのです。そのことについて私たちは「確信」に基づく「大胆さ」を持たなければなりません。

●20節の「設けてくださった」と訳された動詞の「エグカイニゾー」(ἐγκαινίζω)は、「開く」「成立する」「創設する」「奉獻する」とも訳されます。イエシュアの十字架の死を通してすでになされた一回限りの出来事を示すアオリスト時制が使われています。つまり、「新しい生ける道」はすでに開かれたのです。私たちはその事実を確信して、大胆に、至聖所に入ることができるのです。「至聖所」は「恵みの御座」(ヘブル4:16)でもあり、「エデンの園」でもあるのです。

## 3. 「まことの聖所に入る」ことは、神のご計画とみこころ、御旨と目的が完成すること

●はからずも(ルツとボアズの出会いのように)、昨日(2016.6.18)の「サムエル・ミニストリー」での瞑想箇所はレビ記23章1~3節でした。レビ記23章は「**主の例祭**」について記されている章です。「主の例祭」には神のご計画のマスタープランが啓示されています。普通、主の例祭と言えば、①「過越の祭り」②「種なしパンの祭り」③「初穂の祭り」④「七週の祭り」⑤「ラッパの祭り」⑥「贖罪日」⑦「仮庵の祭り」のことを言うのですが、「主の安息日」がそれらの最初に位置づけられているのには意味があります。つまり、「主の安息日」が神のマスタープランが目指す最終目的だからです。最終目的であるということは、主の制定された安息日の完全な真意が開示され、それが完全に成就すること(回復されること)を意味します。

●ヘブル語の修辞法ではしばしば結論的な事柄が最初に置かれます。この修辞法は聖書のある限定された部分に限らず、聖書全体(旧新約聖書)においても然りです。「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う。」(【新改訳改訂第3版】イザヤ書46章10節)とあるように、神のご計画における最終目的は、初めである創世記、特に1~3章の中に告げられているということなのです。創世記3章の最後は、アダムとエバがエデンから追放されることで終わっています。これはいわばエデンの園に至



る道が垂れ幕によって仕切られたことを意味しています。神の本来の創造の目的は創世記 2 章にすでに告げられています。そこにある内容を三つのキーワードで表わすことができます。第一は「**主の安息日**」、第二は「**エデンの園の祝福**」、そして第三は「**結婚の奥義**」です。これら三つのキーワードがすべて創世記 2 章にあります。これら三つは相補的な関係にありますから、どこから入っても神の究極的な目的に辿りつきます。「エデンの園の回復」は空間的視点、「安息日の回復」は時間的視点、そして「結婚の奥義」は関係的視点から神のご計画を啓示しています。これら三つのキーワードが完全に実現すること、完成することが神のご計画であり、みこころであり、御旨と目的です。至聖所に至る垂れ幕が裂かれたということは、それまで仕切られて、隠されていた真理が開示されるだけでなく、それらの事柄が完全に実現することを意味しています。それゆえ創世記 2 章を学ぶことは、殊の外、重要だと考えます。これらの三つのキーワードの内の一つだけ取り上げたとしても、他の二つのキーワードが密に絡んでくるほど親密な関係にあるのです。ということで、今回は、以下に述べる「主の安息日」について取り上げたいと思います。

## (1) 主の安息日

【新改訳改訂第 3 版】レビ記 23 章 3 節

六日間は仕事をしてよい。しかし七日目は全き休みの安息(※1)、聖なる会合(※2)の日である。あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。この日はあなたがたがどこに住んでいても【主】の安息日である。

※1 「全き休みの安息」 - 「シャバット・シャバートーン」(שַׁבָּת שְׁבֻתוֹן)

※2 「聖なる会合」 - 「ミクラー・コーデシュ」(מִקְרָא קֹדֶשׁ)。 「会合」(ミクラー)は「集会」であり、個人的な日としては考えられていません。つまり、聖なる会合とはコミュニケーション(交わり)なのです。集まることが重要なのです。主の例祭がなされている期間中でも、主の安息日は常に優先されます。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 2 章 1~3 節

- 1 こうして、天と地とそのすべての万象が完成された(※3)。
- 2 神は第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた(※3)。
- 3 神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

※3 創世記 2 章 1 節の「完成された」の「カーラー」(כָּלָה)と、2 節の「休まれた」の「シャーヴァット」(שָׁבַת)には密接な関係があります。いずれも意味としては完了形(文法的には継続ヴァヴ+未完了形)ですが、預言的完了形とも解釈できます。つまり、意味合いとしては、「すでに、いまだ」の時間的構造が予見されるということです。すでに完成され休まれましたが、いまだ完成されず、休まれていないということです。完全な完成と休みは実はこれからのことなのです。

- ところで、創世記 2 章 3 節には主の安息日の制定における重要な三つ





のキーワードがあります。それは「祝福した」「聖であるとした(聖別した)」「休んだ」の三つです。これらの動詞の主体はみな神ご自身です。

### ①「祝福した」(「バーラフ」 בָּרַךְ)

●「主の安息日」は本来、主が人々を祝福する日です。そこには人に対する主の愛の配慮と保護があります。エジプトから救い出されたイスラエルの民は荒野において六日間、目に見える「マナ」を食べましたが、七日目にはマナは降りませんでした。七日目には目に見えない神との交わりという「天からのパン」があるからです。それは私たちが永遠に生かすことのできる天からのパン、すなわちキリストご自身です。

●イエシュアはサタンに対して『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある」と言って、サタンの誘惑を退けましたが、御国においては、人は朽ちないからだが与えられるため、目に見えるパン(マナ)は必要ではなくなります。むしろそれに代わって永遠に人を生かす神の口から出ることばによって生きることが定められています。とは言え、回復されたエデンでは食べる楽しみもあるのです(黙示録 22:2)。

### ②「聖別した」(「カーダシュ」 קָדַשׁ)

●「聖別する」とは、本来、神に属するものとそうでないものとを「取り分ける、区別する、分離する」という意味です。その目的はより強い神の臨在にふれることと関係しています。エデンの園では常に神との交わりが可能でした。いつも神の臨在にふれていたのです。その「型」であるモーセの幕屋の建造の目的は、主がご自身の民の中に住むことでした(出 25:8)。聖所を意味する「ハ・ミシュカーン」(הַמִּשְׁכָּן)は「住む」(「シャーハン」 שָׁחַן)から派生した語です。イエシュアは「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にある」(マタイ 18:20)と言われました。それは安息日でなくてもいつでも可能だと思いますが、「安息日」に聖なる会合として集まるところには、主は特別な臨在を現わされるという約束であると信じます。神の永遠のご計画では、神と人とが永遠に共に住むという御国(回復されたエデン)においては、主の臨在(シャハイナ・グローリー)は当たり前になるのです。

●十戒の中に、「安息日を覚えて、これを聖とせよ」とあります。それは週の中で「安息日」を特に意識して「区別する」ことを意味しています。それは「覚える」ためです。この「覚える」(「ザーハル」 זָכַר)は、「思い起こす」という意味です。何を思い起こすのかといえば、それは神のご計画の完成、究極の目的を思い起こすのです。それは、イエシュアの十字架によって贖われ、罪を赦されて神のこどもとされたことだけでなく、何のためにそうされたのか、その究極的な目的がすでに聖書の中に啓示されているのですから、それを思い起こすことなのだと思えます。十字架による「神の恵みの福音」だけを思い起こすだけでは不十分です。加えて「御国の福音」、つまり、神のご計画の究極的なみこころ、御旨、目的を思い起こさなければなりません。それが「安息日」が制定されていることの意味なのだと思えます。詩篇などはそうした視点から主を賛美し、主を礼拝しているのです。ダビデの幕屋が回復するとは、そうした神のご計画の鳥瞰的視点

が回復されることでもあるのです。

### ③ 「休んだ」(「シャーヴァット」 תַּבּוּט )

●神の働きが休むときには、神の十全なる、完全な、永遠のシャーロームがもたらされます。ヘブル語には「休む」という意味を持つ「シャーヴァット」(תַּבּוּט)の他に、「ヌーアツハ」(נוּחַ)という語彙があります。この「ヌーアツハ」は全く何もしていないということではなく、主とともに、主が置いてくださったところで憩うこと、つまり、主の祝福を十全に楽しむことを意味します。

●この「ヌーアツハ」(נוּחַ)が聖書で最初に使われている箇所は、主がエデンの園に人を「置かれた」という形で使われています。単にある場所に置かれたというだけでは意味がありません。主はそこで人にエデンの園を耕し、そこを守ることを命じています。特に、エデンの園が回復された後には、そこを「耕す」ということが課題となります。なぜなら、「耕す」ことは祭司としての務めだからです。つまり、回復されたエデンとはそこに人が再び置かれることを意味します。主のすばらしさを味わい、楽しみ、喜びをもって主を礼拝することで満ち足りるのです。そこですでに人は新しい朽ちることのないからだを与えられているために決して重荷とはなりません。それが「ヌーアツハ」の意味であり、名詞の「メヌーハー」(מְנוּחָה)も同様の意味となります。詩篇 23 篇 2 節で「主は私を緑の牧場に伏させ、・・・いこい(「メヌーハー」 מְנוּחָה)の水のほとりに伴われます」とダビデは歌いました。この「いこい」と訳されたヘブル語が「メヌーハー」で、「休息」「安息」を意味します。それはダビデが永遠の祝福として約束されている主の安息を預言したものとと言えます。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。」(23:1)。まさにこれは回復されたエデンの園の祝福です。そこに主が永遠に伴われるからです。

●主の安息日の制定は、エデンの園において(まだ人が罪を犯す前に、まだユダヤ人が存在する前に)、結婚の制度とともに定められました。つまり、全人類のために神が定められたものです。単に、安息日を規則のように守ることが大切なのではありません。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません。」(マルコ 2:27)とある通りです。主の安息日の制定における三つのキーワードである「祝福した」「聖であるとした(聖別した)」「休んだ」の完成に向けての「新しい生ける道」が、今やイエシュアによって開かれていることを心に留めましょう。至聖所と聖所を仕切る垂れ幕はすでに引き裂かれています。ですから、神の安息の完成を信じて、大胆に、神に近づく者となりましょう。これこそが、イエシュアがこの世に来られて宣べ伝えられた「御国の福音」と言えるのではないのでしょうか。「人の子は安息日の主です。」(マルコ 2:28)

2016.6.19